

2017年1月23日

博士学位審査 論文審査報告書 (課程内)

大学名 早稲田大学
研究科名 大学院人間科学研究科
申請者氏名 中山 なな
学位の種類 博士 (人間科学)
論文題目 (和文) 近世墓にみる江戸の子どもの生と死
論文題目 (英文) Life and Death of Children of Edo, Early Modern Japan: Implications from Burials

公開審査会

実施年月日・時間 2016年12月12日・12:30-13:30
実施場所 早稲田大学 所沢キャンパス 100号館 第4会議室

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位 (分野)	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	谷川 章雄	博士 (人間科学)	早稲田大学	考古学
副査	早稲田大学・教授	蔵持不三也	博士 (人間科学)	早稲田大学	文化人類学
副査	早稲田大学・准教授	原 知章	博士 (文学)	早稲田大学	文化人類学
副査	聖マリアンナ医科大学・准教授	長岡 朋人	博士 (医学)	聖マリアンナ医科大学	自然人類学

論文審査委員会は、中山なな氏による博士学位論文「近世墓にみる江戸の子どもの生と死」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

- 1.1 博士論文では修士論文をどのように発展させたのかという質問については、修士論文では発掘された子どもの墓と出土人骨のエナメル質減形成の分析を行なったが、博士論文ではこれに加えて、子どもの墓標および出土人骨の歯科疾患をはじめとする詳細かつ広汎な分析を行なったという回答があった。
- 1.2 近世の子ども観と地蔵信仰や貝原益軒の『和俗童子訓』などの教育書との関係については、子どもの墓標には地蔵菩薩像を刻んだ舟形墓標が見られること、近世の育児書

は18世紀以降に普及したことが説明された。

- 1.3 子どもの「異質性」とは何か、名づけ以降は人間として考えられていたのではないかという質問に対しては、民俗学では、子どもの「異質性」「異界性」「境界性」は、儀礼を経て段階的に喪失すると考えられているという回答があった。
- 1.4 江戸の墓地遺跡における墓の格式と分布の関係についての質問があり、本論文でとり上げた墓地遺跡の事例に基いて、関連する傾向が認められるという説明があった。
- 1.5 身分・階層や男女によって子どものあり方や家意識に差異があるのかという質問については、一般に武家は子どもを少なく生んで大切に育てたが、町人は単身者が多く、また多産多死だった可能性があること、将軍・大名墓の子どもの墓のあり方は性別に関係がないこと、墓標に刻まれた戒名は19世紀になると子どもの年齢による多様性が認められるという回答があった。
- 1.6 大人の骨から子どもの健康状態をどのように分析するのかという質問に対しては、エナメル質減形成、齶蝕、咬耗によること、分析した人骨には子どもの骨も含まれているという回答があった。
- 1.7 以上のように、公開審査会において行われた質疑応答では、申請者は質問に対して適切に回答していたことが認められる。

2 公開審査会で出された修正要求の概要 特になし。

3 本論文の評価

- 3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：本論文は近世墓を分析対象として、近世都市江戸の子どもの生と死に関する諸相を読み解いたものである。具体的には、江戸の墓地遺跡より発掘された埋葬遺構および墓上に造立された墓標から子どもの墓制と子ども観を明らかにし、江戸の墓の出土人骨から子どもの健康状態を分析して、その背景にある江戸の社会との関係を解読することを目的としている。近世の子どもをめぐる問題は歴史的、文化的に重要な研究課題でありながら、従来江戸の埋葬遺構や墓標の研究、出土人骨の研究において体系的に論じられたことはほとんどなかった。こうしたことから、本論文の研究目的は明確であり、かつ妥当なものであると言える。
- 3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本論文において分析対象とした、江戸の墓地遺跡より発掘された埋葬遺構および墓上に造立された墓標は考古学的方法、出土人骨については考古学的知見を踏まえた自然人類学的方法による分析が行われており、その分析結果と江戸の社会との関係の解読にあたっては、歴史学・民俗学などの知見が援用されている。こうした本論文の方法論は、近世考古学をはじめとする歴史考古学においてあるべき総合的叙述の方法に基づくものであり、明確かつ妥当なものと判断される。
- 3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：本論文では、①埋葬遺構では18世紀以降に子どもの墓が区別され、墓標では18世紀中葉以降子どもの戒名が普及することが明らかになり、その背景には子ども観の変容、子育てへの関心があり、身分・階層によって子

どもの「異質性」のあらわれ方が異なっていたこと、②出土人骨の分析によって、18世紀に乳幼児期の健康状態や死亡率の改善、食生活の変化など子どもの健康状態に著しい変化が見られ、身分・階層差もあったことが指摘された。そして、江戸の社会を構成する分節的なあり方が、子ども観の背景にあったという。こうした本論文の成果は、資料に立脚した明確な論旨に貫かれており、妥当なものと判断される。

- 3.4 本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。
 - 3.4.1 近世都市江戸の墓制の研究において、埋葬遺構と墓標の両者を取り上げた子どもの墓に関する体系的な研究であること。
 - 3.4.2 発掘調査による考古学的知見を踏まえた、江戸の墓の出土人骨に関する研究であること。
 - 3.4.3 考古学と自然人類学による分析を行い、歴史学・民俗学の成果を援用した総合的研究であること。
- 3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。
 - 3.5.1 考古学的方法と考古学的知見を踏まえた自然人類学的方法によって、近世墓の構成要素である埋葬遺構と墓標と出土人骨を全体としてとり上げて、新しい近世墓の研究の世界を切り拓いたこと。
 - 3.5.2 近世の歴史的、文化的に重要な研究課題である子どもをめぐる問題を学際的、総合的に論じたこと。
- 3.6 本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。
 - 3.6.1 考古学、自然人類学、歴史学、民俗学などの分野の横断的な研究であり、今後の人間科学における物質文化研究の学際的方向の一つを提示したこと。
 - 3.6.2 考古学的方法と考古学的知見を踏まえた自然人類学的方法を駆使した研究であり、人間科学における物質文化研究の総合的方法の一つを示したこと。

- 4 本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

学術論文

中山なな：2014 近世江戸における子どもの墓制. 古代, 第136号, pp. 125-155.

Nakayama, N.：2016 The Relationship Between Linear Enamel Hypoplasia and Social Status in 18th to 19th Century Edo, Japan. International Journal of Osteoarchaeology, DOI: 10.1002/oa.2515.

その他

《学会発表》

中山なな：2015 江戸の子どもの墓と乳幼児期の身体的ストレス—出土人骨にみられるエナメル質減形成の分析—. 早稲田大学考古学会2015年度総会.

中山なな：2016 江戸における身分・階層と乳幼児期の健康状態. 日本考古学協会第82回総会. (発表要旨pp. 140-141)

Nakayama, N. : 2016 Relationship Between burial and health status of children in 17th-19th-century Edo, Japan: An integration of burial studies and bioarchaeology. World Archaeological Congress 8. (発表要旨pp.126)

5 結論

以上に鑑みて、申請者は、博士(人間科学)の学位を授与するに十分値するものと認める。